



CROSS

NBU総合インタビューマガジン

N-SPO

大分から世界に挑む!

N-CUL

CanSatで描く夢の軌道

NBU公式

新キャラクター誕生

「ブレイブス」を徹底解剖!

Professor's ROOM

論理的思考を追求

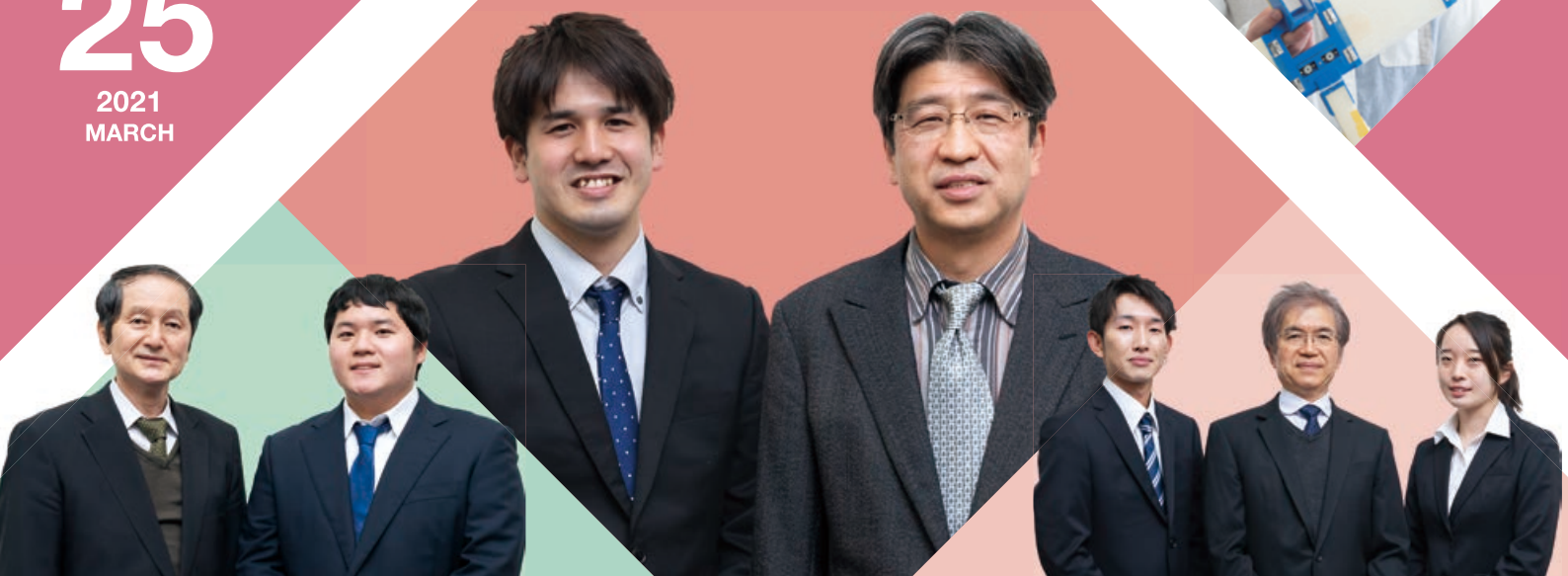
NBU COLORS

25

2021
MARCH

特集

2020年度
卒業研究
論文合同発表会



2020年度 卒業研究・論文合同発表会 最優秀賞 「情報メディア学科 小島研究室」

2020年度の卒業研究・論文発表会で見事、最優秀賞に輝いたのは、工学部情報メディア学科 小島研究室の熊本春樹さん。
これまで数々の映像制作に携わり、多くの受賞経歴を持つ小島教授のもとで、
九州乳業株式会社のプロモーション映像制作に取り組んだ。



アニメーションや イラストなど 子どもたちに楽しさを

小島 まずは最優秀賞おめでとう！受賞する自信はあったの？

熊本 挑戦するからには最優秀賞を狙いたいと思っていました。今回は、牛乳の工場見学時に小学生が視聴するプロモーション映像の制作がテーマでした。はじめに子ども向け番組の放送時間の長さや内容を調査し、小学生にもわかりやすい構成を考えることからスタート。アニメーションやイラスト制作、ドローン撮影など、さまざまな手法にチャレンジしました。

小島 クオリティだけでなく、アニメーションもふんだんに盛りこみ、小学生を楽しませる「しかけ」が詰まっていたからクライアントにも喜んでもらえたしね。映像制作は、クライアントとコミュニケーションを図りながらディレクションもしなければいけないし、他のメン

バーに指示も出さなければいけないけれど、難しさや楽しさは感じた？

熊本 同じゼミのメンバーとは普段から仲が良いので、仕事を依頼することに関してはあまり気を遣うことなく頼めました。僕がディレクターを務め、スケジュール管理や、構成、撮影、編集、イラスト制作などに分けて、それぞれが役割を分担しました。僕1人で作り上げたのではなく、研究室の仲間がいたからこそ作り上げることができたと感じています。

小島 制作風景を見てると、熊本くん自身が楽しんでたね。他のメンバーに対して申し訳なさそうに仕事を依頼するのではなく、「もうちょっと良くしたいからこの部分を少し手伝ってくれと嬉しいな」と、一緒に楽しく良い作品を作ろう、というスタンスで取り組んだのが良かったよ。研究室ならではの結束力もあると思うけれど、みんなにフォローしてもらいながら自分の世界観を進めていくのはとても上手だったね。

小島研究室だから 経験できる 実践的な学び

小島 私の研究室では、企業が行うコンペに参加して、提案から映像を作り上げていくことが多く、学外の人と一緒に作品を制作することで、責任を持って取り組むことができる。学外の人から厳しいことを言われたほうが伸び率も大きいからね。

熊本 企業の方々と一緒に取り

組む経験はとても貴重だし、実践的な学びができる新鮮さがありました。映像制作だけでなく予算管理やビジネスマネーも学ぶことができました。また、研究室の先輩方は、率先して動き、さまざまなことにチャレンジする貪欲な姿勢の人ばかり。刺激をもらうことも多かったです。

小島 研究室に入ったばかりの頃の熊本くんは、どちらかというと大人しくて、野心に燃えるタイプではない印象。映像に

対してどこまで情熱を持っているか未知数だった。しかし、実は内に秘めた熱い情熱があるよね。私は、学生が提出した企画、映像に対して、自分の考えや修正指示を率直に伝えることが多い。それは作品を良くするためのものなんだけれど、なかには自分を否定されていると感じて諦めてしまう学生もいる。でも、熊本くんの場合は違った。素直に「わかりました」と一つ返事で、しばらくしたら修正前よりもはるかに良くなった作品を提出してくれる。

そこがすごいなと思ったよ。

熊本 さまざまな映像作品に携わってきた小島先生のもとで基礎から実践的なスキルまで身につけることはきっと自分の糧になるはずですよ。とにかく映像のプロフェッショナルの話を聞いて、吸収することで、まずは自分のベースとなる部分を作っていくという野望がありました。今後何が良くないのか、何が自分に足りないのか、それをカバーするためには何をすべきなのかを考え続けること

が、スキルアップにつながると感じています。

小島 春からは東京の制作会社でいよいよ本場のプロの道を歩むことになるね。大変なことも多いとは思いますが、作品をより良いものにしてほしいという結果のミスなら、みんなが助けてくれるよ。日頃から伝えているけれど、映像制作で一番大切なのは、自分の思いをクライアントに届ける、ということ。良いものを作りたいと思う気持ちがあれば、きっと大丈夫だと思うよ。頑張ってください。

テーマ：「プロモーション映像の効果的な演出及び制作の研究」



映像は広告プロモーションにおいて有効なメディアだが、制作過程において制約も多い。演出プランや撮影、編集などの技術的側面から、誰もが何度も見なくなるプロモーション映像の制作を目指した。実際に、「九州乳業株式会社」に提案し、工場見学時に視聴する映像を制作。牛の博士と子牛のアニメ

キャラクターを用いて小学生にわかりやすい構成を組み立てた。ドローンによる空撮も活用しながら撮影を行い、工場外観や牧草地を立体的に表現。クライアントや小学生からも「栄養素や豆知識を取り入れ学習効果も高い」「飽きずに見ることができた」と大好評だった。

工学部 情報メディア学科教授
小島 康史
(Yasufumi Kojima)

長年、映像クリエイターとして多くの作品を手がけた経験から、人の心を動かす動画コンテンツについて研究する。制作者も視聴者も感動できるような映像制作に取り組んでいる。



工学部 情報メディア学科4年
熊本 春樹 (Haruki Kumamoto)
(鹿児島県/県立大島北高校出身)

大学入学前から映像制作に興味があり、2年次から小島研究室に参加。大学時代には企業CMなど数々の映像制作を経験。4月からは東京の映像制作会社でADとして番組制作に携わる予定。



2020年度
卒業研究・論文合同発表会 優秀賞航空宇宙工学科
岡崎研究室

NBUでは、宇宙エレベーターやCanSatなど、長年宇宙開発につながる研究に取り組んでいる。数々のプロジェクトの指導を行う岡崎教授のもと、本田桜子さんと松舟壮陽さんが宇宙エレベーターのスケールモデル開発に向けた実験を重ね、その結果を卒業研究として発表に臨んだ。



本田さん(右)と松舟さん(左)と岡崎教授。二人は卒業後も研究室での学びを糧に頑張りたいと意気込む。

夢と可能性に溢れる
チームの集大成

本田 私は大学2年次から、地上と宇宙をつなぐ輸送機関の開発をテーマにした「宇宙エレベータープロジェクト」に取り組み、技術開発促進のために開催される競技会「SPEC」に参加してきました。今回の発表はその集大成になりましたね。「絶対入賞したい!」と気合い十分でプレゼンテーションに臨みました。

松舟 僕は、卒業研究で初めて「宇宙エレベーター」をテーマにした研究に取り組みました。右も左もわからない状態でスタートしましたが、以前からプロジェクトメンバーとして携わってきた本田さんとの共同研究だったので、とても心強かったです。

岡崎 二人とも全く違う個性の持ち主で良いペアだったよ。本田さんは多くの人に研究成果をアピールするのが得意。話も上手だから人を魅了する力がある。一方、松舟くんはプレゼンでは緊張していたけれど、コツコツと実験を重ねて緻密にデータを導き出し、研究結果をまとめてくれた。お互いの強みを活かし、弱点をうまく補い合いながら取り組んだからこそ優秀賞を受賞できたと感じているよ。

本田 実は計算式やデータの解析などは、苦手な分野なんです。今回、さまざまな実験を行いました。成功につながったのは松舟くんのおかげだと思っています。お互いにコミュニケーションを図りながら二人三脚で歩んできました。

岡崎 私の研究室がチーム制を取り入れているのは、一人よりも複数人で取り組んだほうが良い結果を生み出すと学生たちに気づいてほしいから。1+1は2になるのではなく、3にも4にもなる。それぞれがカバーしながら大きな力を発揮することができると。それを体験することに重要な意味があると思う。

松舟 ようやくプログラムを組み終えたと思ったら、想像していた結果と違うことも多く、その度にどこが悪かったのか考え、もう一度検証するという繰り返しでした。焦りや苛立ちもありましたけど、二人でひとつひとつ解決する達成感や喜びがすごく大きかったです。今回の実験を通して、課題を見つける力や問題点を見抜く力が身についたと思います。

本田 宇宙エレベーターの実用化はまだまだ先のことかもしれませんが、私たちの研究がどんなに小さなことでも何かの形で活用できればいいなと思っています。社会に出て、プロジェクトでの意欲や向き合い方は

よ完成間近だと気持ちが高ぶっていただけにとても落ち込みました。ほかに、図面上ではジャストサイズだったのに、実際に加工してみたら大きさが合わずに、何度か部品を作り直すこともありました。

富田 でも、それはすごく良い経験をしたと思うよ。企業でのものづくりは、必ず期限が設けられているし、さまざまな責任が問われる。学生だからこそ、失敗も許されるし、失敗したことが更なる改良に結びつく。成果物ができた喜びだけでなく、失敗も含めて作り上げていく過程の面白さを感じることができたんじゃないかな。

松岡 結果だけでなくプロセスが重要なことは痛感しましたね。フレーム設計に入る前に先輩方が作った自動車に試乗しましたが、乗るだけでは理解できないことがたくさんあります。完成に至るまでの段階を全て実際に経験することで、本当に良いものを作ることができると気づきました。

富田 ものづくりの業界では、設計や機械加工、解析など、必要となる分野が多岐に渡る。今回のように一から全てのプロセスを経験することは、将来必ず役に立つと思うよ。社会人になってからの活躍も楽しみにしているよ。

松岡 今回、友人や先生方に完成した自動

2020年度
卒業研究・論文合同発表会 優秀賞機械電気工学科
富田研究室

富田研究室で2015年から取り組んできた小型電気自動車の製作。松岡航平さんは高校時代にNBUを訪れた際に試乗したことをきっかけに、実際に自分も小型自動車を作りたいという思いから卒業研究として取り組むことを決意。コンセプト立案から、設計、機械加工、完成までの制作プロセスについて発表した。

「先輩から受け継いだ小型自動車を走らせることができてよかったです」と松岡さん(右)と富田教授。

あらためて体感した
ものづくりの面白さ

松岡 プレゼンに全く自信がなかったので、優秀賞に選ばれたときは本当に驚きましたし、すごく嬉しかったです。新型コロナウイルスの影響で思うように就職活動に取り組むことができず、卒業研究に集中できたのが4年次の秋だったので、正直、完成は難しかったらと思うていました。しかし、研究室の仲間の「楽しみにしている」という言葉に背中を押され、心のギアを上げることができました。自作の自動車が動き、無事に試乗するまでに作り上げることができた瞬間は言葉では言い表せないほど嬉しかったですね。

富田 最初の頃は研究が終わらないんじゃないかと心配していたけど、後半は驚くほどスピードが上がり、「一生懸命取り組んでいる姿が印象的だった。設計だけで終わるのと実際に完成品を作りあげるとでは喜びが全く違うよね。頭の中で考えていることを実際に図面に書き起こして、一つひとつ具現化していく面白さがある。無事に完成させることができて良かったよ。研究を進める中で印象に残っていることはある?

松岡 ブレーキとタイヤを取り付ける瞬間に、そのブレーキに繋がるパイプが折れて、オイルが漏れてしまったことですね。いい

必ず役に立つはず。今後も自分の可能性を広げていくためにも、いろいろなことに挑戦していきたいです。

天体表面と宇宙をつなぐ次世代の大量輸送機関として、注目されているシステム「宇宙エレベーター」。カーボンナノチューブ(CNT)の発見により、地球上に必要な強度をもつケーブル素材(テザー)の実現性が高まり、研究開発が進められている。今回の発表会では、スケールモデルの開発を目指し、2017年に開発した機体をベースにモーター制御実験やセンサー開発を行い、ブラシレスモーター2駆動の同期制御に向け、研究を行った結果を発表した。



テーマ:「宇宙エレベーターのスケールモデル開発」

車に試乗してもらえたことが、自信につながりました。4月から県内の自動車部品メーカーで働きますが、社会人になっても「あの車は僕が作っているんだ」と気持ちを高めながら仕事に邁進していきたいと思っています。

テーマ:「小型電気自動車の製作」



2015年度からコンセプト決定、サスペンションの選定などを行い、2016年度にやっと車らしいカタチになった小型電気自動車制作のプロジェクト。これまで何度も試行錯誤を繰り返しながら欠点の改善に取り組んできた。今回は、旋回性能向上と運転席のスペース拡大のため、試作モデルのフレームの再設計からスタート。電気制御装置やモーターなど、過去のものも流用しながら、改良を重ねた自動車を完成・走行させることに成功した。



NBU公式新キャラクター「BRAVES」が登場! (ブレイブス)

徹底解剖!



ツノ
大きなツノは、文理の「B」とBRAVESの「B」を表現

左手
未来を拓く
向上心をイメージ

足
大きなヒヅメで
しっかりと大地を踏みしめる

右手
困難に動じない
強い決意を表す

胸の炎の模様
情熱と勇敢な
チャレンジ精神の象徴

“勇気と優気”の結晶「BRAVES」が 4月から学生の皆さんを全力応援します!

NBUの教育スローガン
「Be Good & Brave! 勇気ある良き市民たれ」
先輩から後輩へ受け継がれてきたこのNBUスピリットの象徴として、2021年4月に公式新キャラクター「BRAVES(ブレイブス)」が誕生します。

自分の限界を乗り越える「たくましさ」である勇気と大切な誰かを思いやる「やさしさ」である優気を胸に今後は、この新キャラクター「BRAVES」が大学行事やイベント、地域活動や部活動などのさまざまな場面で、志高く、目標に向かって歩み続ける学生の皆さんを応援します!



スピード感や挑戦するイメージを書体で表現。文字同士をつなげて、チームワークや仲間同士の絆を表しています。

兄の影響で 数学の面白さを知る

父の転勤で、東京、福岡、大阪と移り住み、中学生の頃は、東京で過ごしました。年の離れた兄2人に、幼い頃から数字を使ったパズルで遊んでもらうなど、遊びを通して数学や物理に親しんでいました。無駄な計算式を並べず、美しいアプローチで問題が解けた達成感はこの上なく、そこに数学の面白さを感じました。学校生活では、友人と大いに楽しむ毎日。特に音楽が大好きで、大学でもコーラス部に所属していました。音楽と数学・物理は、一見、関係がないように見えますが、思考のプロセスなど、共通点が多くあるように思います。音楽は、空気の振動が伝わる波動という物理現象に、規則性や芸術性といった美しさを見出して楽しむもの。音そのものには数的性質があります。数学・物理においても、数字や論理など無機質なものの中に「美しさ」が存在し、そこに魅了されました。

最先端の研究に 夢中になる学生時代

大学では、教養学部の基礎科学科で数学・物理を中心とした幅広い分野について学んでいましたが、最終的にたどり着いたのはコンピュータ分野。今でこそICTやIoTなど盛んに言われていますが、当時はまだまだ黎明期で、大学で情報系の学部が設立されはじめた頃でした。漠然と「カッコいい!面白そう!」と感じ、その分野へ進みました。大学卒業後は、そのまま富士通研究所の研究員の道を歩むことになりました。1年目はソフトウェア研究部に配属されたのですが、2年目はハードウェア設計法のグループへ異動に。電子回路についてはある程度学んでいましたが、実は苦手な分野。とてもショックだったことを覚えています。しかし、そこから本格的に論理の世界へ進み、数十年経った現在もそのフィールドにいます。今、思えばそこがターニングポイントだったのかもしれない。

論理的思考から 新しい道が生まれる

研究所勤務時代に、カリフォルニア大学パークレー校の授業に参加する機会を得ました。そこで体験したのは、先生が教壇に立って話続ける一方通行の授業ではなく、学生の意見や質問が飛び交う刺激的な授業。研究所を退職後、いくつかの研究機関勤務を経て、大学教授の道へ進みましたが、パークレーでの経験が、現在の私の教育スタンスにつながっています。学生たちに伝えたいことは、完璧でなくても良いから、活発に意見を出すことが大切ということ。多くの意見が新しい道につながる場合もあるのです。また、研究を行ううえで、プロセスや根拠を知ろうという姿勢も重要です。論理的観点から物事を正しく判断することも意識してほしいですね。今後も積極的にコミュニケーションを取り、学生のやりたいことや研究テーマに合わせた指導を行っていきたいと思っています。



工学部 情報メディア学科
松永 多苗子
東京大学教養学部基礎科学科卒業、早稲田大学大学院情報生産システム研究科博士後期課程修了。工学博士。株式会社富士通研究所研究員、九州産業大学工学部電気情報工学科准教授などを経て2016年より現職。専門はLSI設計自動化。

Professor's ROOM

#06

論理的な思考を持ち
新しい道を切り拓く。

ICT(情報通信技術)が社会と密接に関わり、IoTやAIなどを活用したデータサイエンスが進化を続けています。「高位合成技術」を利用したシステム開発の研究を行う松永教授。最新技術を活用するうえで、研究者が大切にすべきこと、学生たちに伝えたいことは何なのか、自身の経歴を振り返りながら語ります。





今注目のスポーツ選手をご紹介！

i-SPO Road Race

工学部 航空宇宙工学科3年

宮崎泰史

大分県熱狂させ
世界に挑戦する。

06

経験を活かして
夢の軌道を描く。

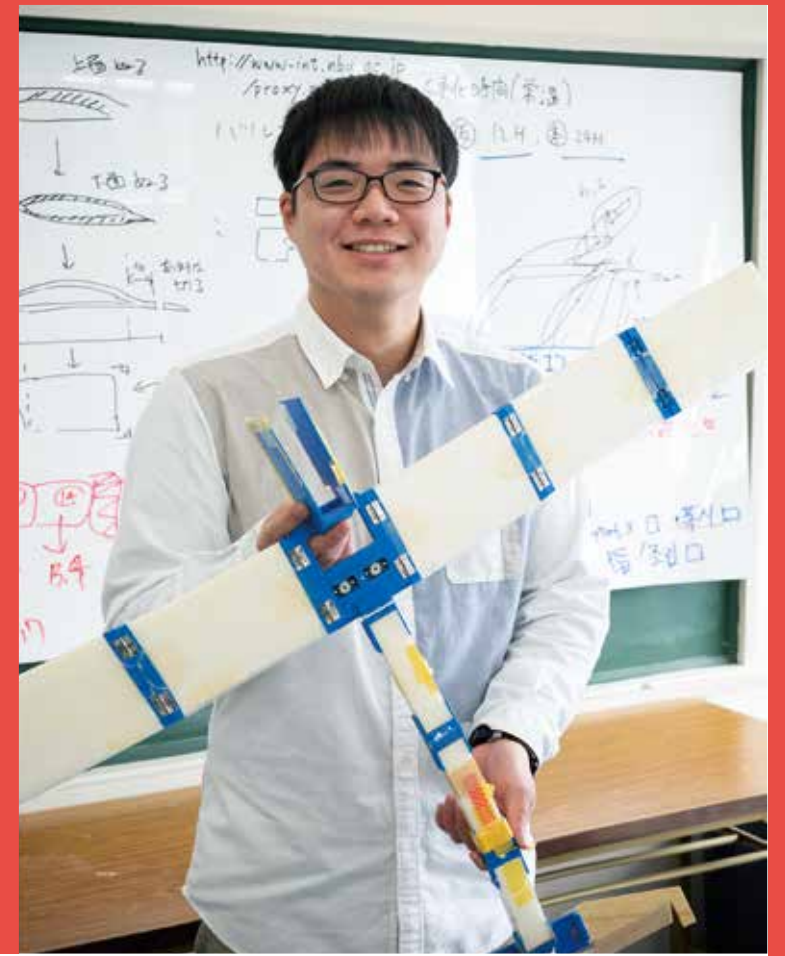
工学部 航空宇宙工学科3年

萱島良祐

CanSat

i-CUL

次世代のクリエイターはキミだ！



2021年1月、大分初のプロ自転車ロードレースチーム「Sparkle Oita Racing Team」が誕生した。国内のトップ選手が集結するチームに加入した宮崎泰史さんは、若手の注目株として有望視されている。

意外にも本格的に自転車をはじめたのは大学に入学してから。小さい頃からサッカーや野球、陸上競技など、さまざまな競技を経験していたものの、スポーツとして自転車を意識したのは高校3年のとき。趣味としてサイクリングをはじめたことがきっかけだ。大学に入学してしばらく経った頃、偶然通りかかった大分市内のサイクルショップに自転車の修理を依頼したことが、宮崎さんの未来を変えることとなった。ショップの方からレーシングチームへの加入を提案され、数々のアマチュアレースに参戦。チームで競うロードレースの競技会に参加するだけでなく、個人種目のタイムトライアルの大会にも出場し、全日本6位という結果を残している。「ロードレースでは、それぞれの選手の特徴に合わせ、優勝争いを行うスプリンターや坂道が得意なクライマーといった役割があります。また、コースやその時の天候、風などでレース展開が全く異なります。チームで戦略を立てながら勝利を掴む面白さがたまります」と目を輝かせる。

アマチュアロードレーサーとして着実に経験を積んでいた2020年10月、大分初のプロチームが設立されることを機に勧誘を受けた際は「メンバーには、インカレ優勝者やアジア記録を持つ国内トップクラスの選手ばかり。話をもらったときはと

ても驚きました」と宮崎さんは振り返る。

アマチュア時代は、とにかくハードな練習メニューばかりを実践していたが、プロのレースでは1日200km、月に3000kmという距離を走行するため、疲労でパフォーマンスが悪くならないように適度な休息や栄養バランス、日常生活までトータルで考えていく必要がある。そのためプロになってからは、競技に対する考え方に加え、ライフスタイルもガラリと変わった。

まずは、3月からスタートする「ジャパンサイクルリーグ」でのリーグ優勝が目標と話す宮崎さん。チーム最年少として、やるべき役割をしっかりと果たしたいと気合は十分だ。「このチームならきっと優勝できるし、大分を盛り上げていける。自分自身の力をもっと磨いていきたい」と闘志を燃やす。さらに、チームでの活躍だけでなく、2021年6月に開催されるU-23(23歳以下)大会の個人タイムトライアル競技での優勝を目指す。彼の挑戦はまだまだ始まったばかり。先輩たちの大きな背中を追いかけ、自転車界と大分のスポーツ界で閃光を放つチームの一員として活躍してくれるに違いない。



みやざき たいし(熊本県/県立熊本工業高校出身)/2019年全国タイムトライアルU-23 6位、秋吉台カルストロードレースE1クラス3位。チームではクライマーを担う。「大分初のプロ自転車チームのメンバーとして競技にチャレンジできることに大きな喜びを感じる。地域の方々と一緒に大分を盛り上げていきたい。」と意気込む。

大分空港がアジア初のスペースポートに選ばれ、湧き立つ大分県。2022年には「第33回 宇宙技術および科学の国際シンポジウム(ISTS)大分県府大会」が開催される予定だ。そのプレイベントとなる「CanSat Competition in Oita」を2020年12月5日、6日にNBUの企画・運営で開催した。萱島良祐さんは、イベントを成功に導いた運営メンバーのひとりだ。

NBUの航空宇宙工学科を中心に取り組む「NBU CanSat Project」では、毎年「種子島ロケットコンテスト」や「能代宇宙イベント」での缶サット競技会に挑戦してきた。これらの競技会では、上空から放出された缶サットの降下時の自律飛行、または着地後の自律走行により、いかにゴールに近づけるかの技術を競うものだ。2019年の「第33回 能代宇宙イベント」で、NBUは優勝。萱島さんもメンバーとして会場で勝利を味わった。しかし2020年は、コロナ禍の影響でどちらの競技会も会場での開催が中止に。プロジェクトメンバーの「大分で大会を開催したい」という希望と、ISTSに向けたプレイベント公募のタイミングが重なったことから、大分県に企画を提案。プレゼンテーションの結果、見事に採択を受けた。

運営は初めての経験。チーム最年長の3年生である萱島さんが担当したのは、上空から缶サットを放出するためにクレーンに設置するケース「キャリア」を製作する役割。「裏方の役割ですが、とても重要な部分を任せられプレッシャーでした」と話す。その一方で、競技に参加する1~2年生へのフォローも欠かさ

なかった。緊急事態宣言下でオンラインで始動した新年度プロジェクトでは、直接会ったことのない新入生たちとコミュニケーションを取りながら、機体製作のアドバイスをを行った。「思うようにスケジュール管理ができず、大会前日は徹夜だった」と振り返る。ゲストに気持ちよく参加してもらうため、過去に参加側として感じた改善点を、今大会では反映させた。柔軟な対応を心がけた結果、競技会を無事に成功させることができた。

もともと情報メディア学科志望だったが、オープンキャンパスに参加し、「大学では新しいことに挑戦したい」と航空宇宙工学科へとシフトチェンジした萱島さん。入学後、「勉強になりそうだ」とCanSat Projectに加わった。楽しいだけでなく、学びに直結する点に魅力を感じたという。「結果がどうであれ、大会に参加し、苦勞して作り上げたものを実際に動かすということがモチベーションにつながる」と実感した。今後は「火星用航空機の制御」をテーマに卒業研究に取り組み、「将来は、航空機などの設計に携わりたい」という。NBUでスタートした夢への軌道を、高く、高く、描き続ける。

※CanSat(カンサット)=缶サットとは、空き缶サイズの小型模擬人工衛星のこと



かやしまりょうすけ(大分県/県立国東高校出身)/新たな挑戦のため、大学では航空宇宙工学科を専攻。火星への輸送をイメージして競われた「CanSat Competition in Oita」では大会を運営する側として大きな達成感を得た。後輩たちにも熱い想いを伝えるべく「CanSat ProjectにもOBとして関わり続けたい」と語る。

様々なフィールドで活躍する
NBU生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU COLORS



21

経営経済学部 経営経済学科4年
谷川 由希
(宮崎県/県立高千穂高校出身)

地域振興に携わった4年間 学びを地元へ還元したい

「高千穂あまてらす鉄道創立10周年記念『高千穂鉄道の思い出』」企画に、祖父とのおどろきと現在の姿を書いたエッセイを応募し、見事優秀作品賞を受賞した谷川さん。作品はNPO法人山参会が発行する記録文芸誌『かなたのひと』に掲載された。高校卒業後はすぐに「公務員として地元の宮崎県西臼杵郡日之影町を盛り上げる仕事したい」と決意していたが、「一度県外へ出て、地元の現状や改善策を学んでみては？」と恩師の一言がきっかけで、NBUへの進学を決めた。入学後は授業やプロジェクト活動で、豊後大野市をフィールドに地域住民の皆さんと一緒にイベントや農家の手伝いなどの活動を積極的に行った。「豊後大野市と日之影町には共通点が多い。地域振興に関する視野が広がった」と話す。所属する今西研究室では、地域活性化やまちづくりに関する研究に取り組み、春からは日之影町役場に勤務する予定。NBUで学んだ知識や経験をフルに活かし、「どの部署に配属が決まっても町民のために活動できる。いずれは観光PRに挑戦したい」と地元の“まちづくり”を担うべく、挑戦を続ける。



【自慢の1カット】

卒業論文のテーマは「道の駅と周辺にある観光スポットとの関連性について」。道の駅 原尻の滝と道の駅 宇目と比較し、それぞれの特徴や強みや課題について比較しながら、解決策を提案した。



22

工学部 航空宇宙工学科4年
甲斐 与貴
(大分県/日本文理大学附属高校出身)

附属高校・大学での経験が 大学院への学びにつながる

附属高校での3年間は、特進コースで朝から夕方まで勉強に励み、放課後はサッカー部の練習に没頭。まさに文武両道を実践しながら、充実した高校生活を過ごした。もともと工業系の分野に興味があり「個性的な学科で面白そうだったから」と、NBUの航空宇宙工学科に進学。4年生からは藤田研究室で「羽ばたき翼」の制御に関する研究を行った。鳥や虫のように、羽を羽ばたかせながら飛行するロボットの飛行を数値化して、安定した飛行を目指して、シミュレーションを重ねる。4月からは、九州工業大学大学院 生命体工学研究科へ進学し、さらに研究を続ける予定だ。「進学先では、私のような外部からの進学者や留学生が多いと聞いています。これまで以上にたくさんの人と研究に取り組み、他の研究メンバーたちとアドバイスを合るのが楽しみです」。今は大学院での新たな学びに向けて、さまざまな分野での勉強に余念がない。将来は大学院でのさらなる研究を活かし、自動車メーカーやロボット関連の企業への就職を目指す。



【自慢の1カット】

卒業研究のテーマは「2枚翼機に発生する外乱とその姿勢不安定性に及ぼす影響について」。藤田准教授や研究室のメンバーからももらったさまざまなアドバイスを糧に、新たな学びのステージに進む。



23

経営経済学部 経営経済学科4年
渡邊 政哉
(大分県/県立佐伯鶴城高校出身)

地域活動で培った経験を 仕事に生かしていく

高校時代、地元の佐伯市鶴見町でさまざまな地域おこし活動に参加した経験から、オープンキャンパスで経営経済学科の「地域マネジメントコース」に興味を持ち、NBUに入学。その後、人間育成センターでの中心プロジェクトの一つである「豊後大野プロジェクト」に参加し、他の学生たちや地域住民と協力しながら地域の課題解決に取り組んだ。「フィールドワークが多く、土日のほとんども地域活動に費やしましたが、他の大学では体験できない貴重な学びでした」と振り返る。特に印象に残っているのは、豊後大野産の椎茸を子どもたち自身で料理して食べてもらうイベント。また、学生である自分たちと地域の方との間に温度差が生じてしまう地域活動の難しさも経験した。座学やインターネットでは知ることのできない現場の空気に触れ、今やるべきことを学び、将来地域で働く意義について考えるきっかけにもなった。卒業後は「インフラを整備することが地域貢献につながるのではないか」という考えから、土木資材を扱う会社に就職する予定だ。彼の地域活動は、これから新たなステージへと進む。



【自慢の1カット】

「豊後大野プロジェクト」の一環である、犬飼町でのハロウィンイベントの準備をする様子。地元商店街の店舗や近隣住民のお宅を訪問する際に身につける仮装を地元の小学生たちと一緒に手作りした。



24

経営経済学部 経営経済学科4年
リュウ ギョウ
(中国/遼寧省出身)

恩返しの気持ちを大切に 後輩留学生をサポート

新型コロナウイルスの影響で新入生となる留学生の入国が遅れた2020年度。リュウさんはそんな彼らのサポートを率先して引き受けた。「大学生活はもちろん、スーパーでの買い物など日常生活のことまで、当時は毎日のように新入生から連絡がありました」と笑顔で話す。コロナ禍で帰国が難しくなり、不安や悩みを抱える友人や後輩たちに対しても「大丈夫。みんなで一緒に頑張ろう」と励まし続けた。こんなにも親身になってサポートしようと思えたのは、自身が来日したばかりの頃、優しく接してくれた先輩方の存在が大きい。アニメやドラマがきっかけで日本文化に興味を持ち、留学生との交流会でNBUを知った。その後、WEBサイトで調べたり、留学経験のある先輩から話も聞いたりして、2年前に中国からの編入留学を決心。大学では日本企業のマーケティングについて学び、有意義な留学生生活を送った。「今後は更に日本語を勉強して、飲食店やホテルなどのサービス業へ就職したい」。大好きな日本、大好きな大分で働くためのリュウさんの挑戦は続く。



【自慢の1カット】

学内外問わず、留学生たちをサポートするリュウさん。その優しさや面倒見の良さから後輩学生たちからの信頼も厚い。「卒業後も大分にいるのでなんでも気軽に頼ってほしい」と明るく話す。

キラリびと

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くアナタを発見!



工学部 建築学科3年

川村 唯

(大分県/県立別府鶴見丘高校出身)

ものづくりやアートへの関心が高く、所属する建築学科や美術部で積極的に作品づくりに取り組む川村さん。建築学科の有志メンバーで参加したJIA日韓合同学生ワークショップでは、「私からはじまる公共空間」をテーマに、公園と公民館を一つの空間にした作品「コウミンエン」を発表。最終講評会で「中山賞」を受賞した。また、美術部では、廃材木材アートや壁画アートなども制作。「将来は設計を中心に、地域とアートを融合させた建築に携わりたい。そのためにも、建築学科のメンバーと一緒にレベルアップしていきたい」という使命感に燃える。

CROSS

NBU日本文理大学

〒8700397 大分県大分市一木1727
TEL 01200971593

大学院工学研究科 □ 環境情報学専攻 □ 航空電子機械工学専攻
工学部 □ 航空宇宙工学科 □ 機械電気工学科 □ 建築学科 □ 情報メディア学科
経営経済学部 □ 経営経済学科